「大学体育スポーツ学研究（第19巻）」優秀論文賞
選考経過および講評

Ⅰ．選考経過

1．選考対象となる論文

2022年３月に発刊された「大学体育スポーツ学研究（第19巻）」に掲載された11編のうち，寄稿論文１編および過去の優秀論文賞筆頭受賞者による筆頭論文１編を除く９編（総説１編，研究ノート８編）の論文を選考対象とした．

2．選考委員（敬称略）

第１次選考委員：西田順一，難波秀行，園部豊，木内敦詞，梶田和宏，小林雄志，佐藤和，高田大輔，田原亮二，中田征克，中山正剛，西垣景太，平工志穂，藤野和樹，山本浩二（以上，本誌編集委員）

第２次選考委員：木内敦詞（委員長），西田順一（幹事），内田若希，小倉圭，高田義弘，村上貴聡

3．選考結果

第１次選考では，本誌編集委員全員より優秀論文賞に相応しい２編の推薦がなされ，そのうち推薦数の多かった上位２編を第２次選考の対象とした．第２次選考では選考委員が２編に対して量的・質的評定を行った．その結果に基づき，最終的に以下を受賞論文として本連合常務理事会へ上申し，承認された．

受賞論文名

新型コロナウイルス感染症拡大下における大学生のメンタルヘルスと社会的スキルに関する調査研究：
対面授業による体育実技の履修の有無の比較から

著者：寺岡英晋，村山光義，佐々木玲子，稲見崇孝，東原綾子，野口和行，加藤幸司，永田直也，福士徳文

掲載：大学体育スポーツ学研究，19：84-93，2022年３月

Ⅱ．講評

コロナ禍以前は一般に，大学体育実技授業は対面実施によって学生の心身の健康の維持増進に寄与してきた．コロナ禍で通常の対面授業が制約される中，いかにして体育授業を運営したか，また履修者のメンタルヘルスや社会的スキルにいかなる影響を及ぼしたのかについて，著者の所属する大学の学生を対象に，体育履修者と非履修者で比較検討したのが本研究である．

コロナ１年目の2020年４月の段階で，春学期の体育授業を全面休講とすることを決め，秋学期のみ開講したところ，選択科目として開講している体育実技の履修登録数はコロナ前の１.17倍に増加したという．感染対策を講じ，用具や参加人数を制限しながらの授業運営を強いられるなか，学生間のコミュニケーションの促進を重要課題として位置づけながら，各教員の裁量のもと，授業が展開された．10月上旬と12月下旬の２回にわたる web アンケート調査から，以下の結果が得られた．二要因分散分析の結果，体育実技履修者は非履修者と比較して，受講期間の前後におけるメンタルヘルスの向上と社会的スキルの維持が明らかとなった．課外活動への所属の有無や履修種目の違いといった交絡要因を踏まえた解析も行われている点からも，適切な調査設計がなされているといえる．また，課外活動への参加や履修科目の違いよりも，体育実技への参加の重要性を裏づけた貴重な研究である．

本研究は，コロナ禍への対応としての実践にとどまらず，ポストコロナ社会における大学体育授業の新たな可能性を検討する上で有用な，体育授業の実践に寄与する事例と成果を具体的に提示している．よって，本誌第19巻における優秀論文賞に選定した．

以　上